

【講義 6】 装訂・料紙について

落合 博志

一、はじめに

日本の古典籍において、装訂と料紙は、書誌の最も基本的な事項に属する。装訂や料紙によって、本の製作年代や、製作の環境・目的などが推定できる場合もあり、本の性質を知る上で不可欠の要素と言える。

装訂・料紙とも少し込み入った話になるので、あまり古典籍に触れた経験がないとすぐには飲み込めないかも知れないが、慣ればそれほど難しいことではない。この講義が、古典籍の装訂と料紙についての認識をさらに深めるきっかけとなれば幸いである。

二、日本の古典籍の装訂について

【日本古典籍の装訂とは】

現在の書物では、「装訂」という言葉は本のデザイン（狭くは表紙や扉など、広くは造本全体）の意味で使われることが多いが、日本の古典籍においては、「装訂」は基本的に、紙をどのように使って一つの本を作るかを指す。

冊子本さつしほんにおいては、綴じ方こより（糸や紙縫などの通し方）にいくつかの種類がある。綴じ方も装訂の一部であるが、装訂の分類基準は紙の使い方が第一で、綴じ方の違いはその下に位置する。

【日本古典籍の装訂の特色】

世界の書物の中での日本の古典籍の大きな特色として、以下の 3 点が挙げられる。

(1) 装訂の種類が多様であること：卷子本・折本・冊子本に大別され、更に冊子本に多くの種類がある。

(2) 古い時代の装訂が長く継承されたこと：新しい装訂方法が考案されても、そのために古い装訂が減ぶことはなく、さまざまな装訂が並存していた。

(3) 写本に特有で版本には見られない装訂、版本にもあるが分野が限られる装訂があること：日本の古典籍は写本が基本で、版本はその応用として作られたことと関係すると考えられる。中国やヨーロッパでは、版本（印刷本）が出現すると書物の主流が版本に移ったが、日本では後々まで写本が重視された。

三、日本の古典籍の料紙について

料紙は、本を製作するのに用いられた紙を指す。ただし本文とその前後にある序跋・目録などに用いられた紙を言い、表紙については含めない。なお表紙に本文と同じ紙が用いられている場合は、「ほんぶんともがみびようし本文共紙表紙（共紙表紙）」と言う。

日本の古典籍の料紙は、こうぞ楮の樹皮を原料とするちよし楮紙、がんび雁皮の樹皮を原料とするひし斐紙が主要なもので、江戸時代以降はみつまた三椶の樹皮を原料とするみつまたがみ三椶紙も使われた。楮と雁皮を交ぜて漉いたひちよませすきがみ斐楮交漉紙、斐紙に泥土の粒子を混ぜて漉いたまにあいがみ間合紙（どろまにあいがみ泥間合紙）などもある。

斐紙は繊維が詰まっっていて表面が滑らかという特徴があるが、雁皮は栽培できないため楮紙に比べて供給量が少なく、高級品であった。従って、斐紙を用いた本は、概して格の高い書物と言える。

参考文献

（装訂に関して）

『和書のさまざま』国文学研究資料館、2018年 ※国文学研究資料館 HP の「国文研の活動」→「調査収集」→「文献調査（地域資料専門部会委員の方へ）」

→ PDF ファイル「日本古典籍調査要領」の 27～42 ページにあり

石山寺文化財総合調査団編『石山寺の研究 校倉聖教・古文書篇』法蔵館、1981 年

吉水蔵聖教調査団編『青蓮院吉水蔵聖教目録』汲古書院、1999 年

久曾神昇『平安時代仮名書状の研究』風間書房、初版 1968 年、増補改訂版 1992 年

山本信吉『古典籍が語る 書物の文化史』八木書店、2004 年

落合博志「仏書から見る日本の古典籍」国文学研究資料館調査収集事業部『調査研究報告』第 34 号、2013 年 3 月

(料紙に関して)

関義城『古紙之鑑』木耳社、1977 年

反町茂雄『歴代古紙聚芳』文車の会、1982 年

日本古典籍の装訂について

◎は写本に特有の装訂。

○は版本にもあるが、一般的でない装訂。

【日本古典籍の装訂の三分類】

卷子本の類…卷子本・継紙

折本の類…折本・折帖

冊子本の類…袋綴・粘葉装・列帖装など

卷子本の類

卷子本 ○

定義：紙を横に貼り継ぎ、左端に付けた軸を中心に丸く巻いたもの。右端に表紙を付けて全体をくるむ。表紙の端に細い竹や木が巻き込んであり（八双）、そこに巻紐を付ける。

特色：紙面を必要なだけ広げることができる。ただし、任意の箇所をすぐに開けることができない。裏面（紙背）に注釈などを書き込むことができる。

歴史：現存する日本最古の書物である『法華義疏』（7世紀初め）以降の遺品が確認できる。奈良時代までの本は、全て卷子本であったと考えられる。

用法：絵巻をはじめ絵図の比重が大きい本や宗教書・芸道の伝授書などに、後代まで用いられた。写本が多く、版本は経典や写本の模刻本など分野が限られる。

備考：冊子本（特に袋綴本）を解体して卷子本に直したものがしばしばあるので注意。その場合は「卷子本（袋綴改装）」などのように注記する。ただし袋綴本を直した場合は、通常各紙の中央に折り目の跡が残るので、判別が比較的容易である。

継紙 ○

定義：卷子本と同じく紙を横に貼り継いだものであるが、表紙と軸がなく、紙を繋げただけの形態のもの。

特色：卷子本に準ずる性質を持つが、表紙と軸がない点で簡略な形式と言える。

備考：卷子本のように巻いてある場合は、「未装卷子本」あるいは「巻紙」とも言う。ただし丸く巻いていないものもあるので、一般的な名称としては「継紙」が適切である。

折本の類

折本おりほん

定義：紙を横に貼り継ぎ、等間隔で山折りと谷折りを交互に作って折り畳んだもの。

特色：紙面を必要なだけ広げることができる。紙の継ぎ方は卷子本と同じであるが、冊子本のように任意の箇所をすぐに開くことができる。卷子本・冊子本と異なり、表裏両面が使える。

歴史：平安時代末期（12世紀）以降の遺品が確認できる（東大寺蔵『新修浄土往生伝』保元3年（1158）弁昭写ほか）。

用法：さまざまなジャンルに亙って用いられるが、特に折本を主とするジャンルは見当たらない。経典の写本・版本に多いのは、中国の版経の影響か。

備考：本来の折本のほか、卷子本を改装した折本がしばしばあるので注意。その場合は「折本（卷子本改装）」のように注記する。

おりじょう

折帖◎

定義：一定の大きさの厚紙を横に繋げ、継ぎ目部分で折って畳んだもの。

特色：折本と同様、表裏両面が使える。

歴史：手鑑は室町時代末期には製作されていたらしいので、折帖もその頃には存在していたか。

用法：手鑑や短冊帖など、読むためではなく書画を鑑賞するアルバムのな本に見られる装訂。版本の例は未見。

備考：形態上は折本と似ているが、折本では料紙の継ぎ目と折り目が原則的に無関係な点で区別される。

冊子本の類

〔単葉系〕

袋綴ふくろとじ

定義：紙を二つ折りにしたものを重ね、折り目と反対側の端を糸や紙縫こよりなどで綴じたもの（紙縫で下綴じした後、更に糸で膝かがることもある）。

特色：薄手の料紙を用いるものが多い。

歴史：平安時代後期（11世紀）以降の遺品が確認できる（青蓮院旧蔵『諸仏菩薩積義』嘉保（1094～1095）頃写、ほか青蓮院所蔵本）。綴じ方は、古くは紙縫で結び綴じにしたものが多く、糸で綴じたものが現れるのは鎌倉時代中期以降か。

用法：写本・版本を通じ、日本古典籍の装訂として最も一般的なもの。

おりがみとじ
折紙綴 ○

定義：折紙（横長の紙を折り目が下になるように二つ折りにしたもの）またはその半截を重ね、右端を糸や紙縫などで綴じたもの。

特色：薄手の料紙を用いるものが多い。ただし連歌・俳諧の懐紙は、鳥の子紙など厚手の紙を使うこともある。縦横の比率が約1：3の細長い形状。

歴史：鎌倉時代末期（14世紀初め）以降の遺品が確認できる（称名寺蔵連歌懐紙ほか）。

用法：写本の例が大半で、記録や帳簿にしばしば用いられる。連歌や俳諧の懐紙もこの装訂。版本にもあるが、八文字屋本の浮世草子や記録など、特定の種目に限られる。

備考：帳簿類については「長帳綴」あるいは「横帳綴」と呼ぶこともあるが、一般的な名称としては「折紙綴」が適当である。

たんようそう
単葉装 ○

定義：一枚の紙を折らずに重ね、端を糸や紙縫などで綴じたもの。

用法：ジャンルに関わりなく見られる。

備考：紙の両面に書写するため、墨が裏映りしにくい料紙を用いるのが普通。

〔双葉系〕
でっちようそう
粘葉装 ○

定義：紙を二つ折りにし、外側の、折り目の脇を糊代として貼り重ねたもの。

特色：右半葉（頁）と左半葉（頁）が同じ紙で背の際まで開く見開きと、右半葉（頁）と左半葉（頁）が別の紙で糊代の際まで開く見開きが交互に現れる。

歴史：平安時代中期（10世紀）以降の遺品が確認できる（石山寺蔵『息災護摩私記』承平7年（937）写本ほか）。古くは仏書・歌書などに広く用いられ、ある種の仏書（真言宗の諸尊法の柵形本）では明治以降までこの装訂を用いた。

用法：版本の例は、高野版や浄土教版など、仏書に限られる。

備考：紙の両面に書写するため、墨が裏映りしにくい料紙を用いるのが普通。

そうようそう
双葉装 ◎

定義：紙を二つ折りにしたものを重ね、折り目の方を糸や紙縫などで綴じたもの。紙の用い方は粘葉装と同じであるが、糊を使わずに綴じる点で異なる。

歴史：平安時代からある装訂（冷泉家時雨亭文庫蔵私家集など）。

用法：天台宗や浄土真宗など仏書の例が多い。版本の例は未見。

備考：糊離れのした粘葉装の本を糸で膝って補修したものがあり、本来の双葉装と区別する必要がある。

おりがみそうようそう
折紙双葉装

定義：折紙を使って双葉装としたもの。

特色：折紙を二つ折りにするので、縦横の比率が約 2 : 3 の横本の形となる。

歴史：室町時代には存在。

用法：さまざまなジャンルの写本に用いられる。ごく稀に版本の例がある（古活字版『六帖要文』『七帖要文』）。

備考：薄い料紙を用いるのが普通。

〔複式双葉系〕

れつちようそう
列帖装 ○

定義：紙を複数枚重ねて二つ折りにしたもの（一括り・一折^{くく}）を二つ以上並べ、糸などで綴じたもの。

特色：括りを付け足すことによって丁を増やすことができる（大福帳など）。

歴史：平安時代中期（10 世紀）の仏書（石山寺蔵『金剛葉叉儀軌』『一字儀軌』）、平安時代後期（11 世紀）の仏書（勸修寺蔵『敦造紙』）・歌書（関戸本『古今和歌集』など）の遺品が確認できる。

用法：版本の例は、一部の謡本や真言宗の声明本・浄土真宗の和讃本などに限られる。

備考：紙の両面に書写するため、鳥の子紙や厚手の楮紙など、厚手の料紙を用いるのが普通。各括りの折り目の部分に上下二つずつ、計 4 箇所穴を開け、糸を順次通して行く綴じ方が一般的であるが、古くは紙縫などで結び綴じにした例もある。「綴葉装」という呼び方もあるが、「葉」を「綴じる」のは粘葉装・画帖装以外の冊子本に共通の製本法で、特定の装訂の名称としてはふさわしくない。

おりがみれつちようそう
折紙列帖装 ◎

定義：二つ折りにした紙を使って列帖装としたもの。

用法：版本の例は未見。

備考：薄い料紙を用いるのが普通。「双葉列帖装」の名称は不可。

たんじようそう
単帖装 ◎

定義：列帖装の一括りだけの形のもの。

歴史：古い遺品がなく、列帖装より後に発生したらしい。

用法：仏書・歌書・謡本など、さまざまなジャンルの写本に見られる。版本

の例は未見。

備考：列帖装と異なり、折り目の部分の綴じ穴が2箇所だけのものもある。

〔その他〕

画帖装^{がじょうそう}

定義：紙を二つ折りにし、外側の、折り目と平行の端を糊代として貼り繋いだもの。さらに粘葉装のように、折り目の両脇も糊付けする場合がある。

特色：折本や折帖に似た所もあるが、裏面が使用できない点で異なる。

歴史：江戸時代後期（18世紀）以降の遺品が確認できる。比較的新しい装訂。

用法：一枚で完結する絵を集めて冊子にする場合などに用いられた。版本の例が多く、写本は比較的少ない。日本の古典籍には珍しく、版本で最初に発生した装訂か。

《冊子本の装訂の体系分類案》

◇紙の用い方による分類

〔単葉系〕袋綴・折紙綴・単葉装

→1枚の紙が1単位で、それが1丁（1葉）になる

〔双葉系〕粘葉装・双葉装

→1枚の紙を二つ折りにしたものが1単位で、それが2丁（2葉）になる

〔複式双葉系〕列帖装・単帖装

→複数の紙を重ねて二つ折りにしたものが1単位で、それぞれの紙が2丁（2葉）になる

〔その他〕画帖装

→1枚の紙を二つ折りにしたものが1単位で、通常1枚の紙ごとに内容が完結しており、「丁（葉）」を以ては数えにくい（「紙数〇枚」が妥当か）

◇綴じ方（糸や紙縫の通し方）による分類（*は仮称）

結び綴じ

膝綴じ*^{かが}（四つ目綴じ・五つ目綴じ・康熙綴じ、ほか）

紙釘装^{しゅてい}

背穴綴じ*

etc.

※装訂の分類基準は紙の用い方を第一にすべきで、綴じ方の違いはその下の

レベル。